

今週の為替相場見通し(2021年4月19日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		108.61 ~ 109.77	108.79	107.50 ~ 110.50
ユーロ	(ドル)		1.1872 ~ 1.1995	1.1983	1.1900 ~ 1.2100
(1ユーロ=)	(円)		129.82 ~ 130.60	130.36	129.50 ~ 131.00
英ポンド	(ドル)		1.3670 ~ 1.3849	1.3849	1.3700 ~ 1.3900
(1英ポンド=)	(円)	*	149.39 ~ 150.83	150.49	148.80 ~ 151.50
豪ドル	(ドル)		0.7585 ~ 0.7761	0.7734	0.7580 ~ 0.7800
(1豪ドル=)	(円)	*	83.03 ~ 84.41	84.15	83.00 ~ 84.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 原田 和忠

(1) 今週の予想レンジ: 107.50 ~ 110.50 円

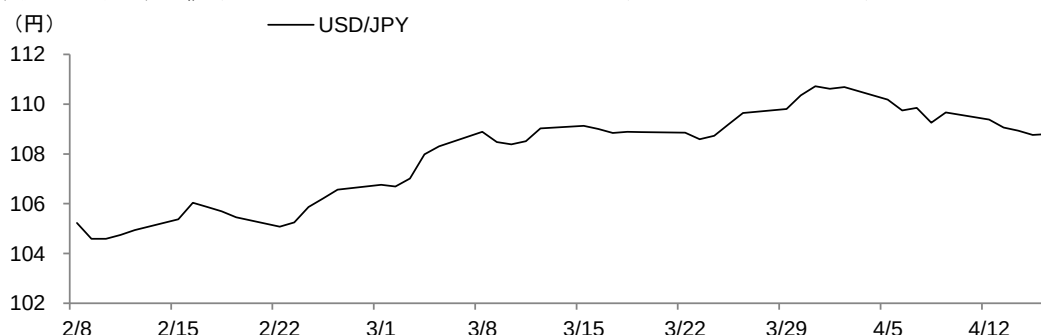
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は下落し、約半月ぶりに109円を割り込む展開。週初12日、109円台後半でオープンしたドル/円は、直後に週高値の109.77円をつけるも、週末にパウエルFRB議長がハト派な発言をしたことを受けて軟調地合いとなり、109円台前半までじりじりと下落した。13日は、米金利の反発を受けて、ドル/円は一時週高値付近まで上昇。しかし米国製の新型コロナウイルスワクチンの接種による副作用が確認されたことでリスクオフムードが高まると終盤にかけて109円付近まで反落した。14日にかけても、ドル/円は軟調推移。欧州通貨や資源国通貨に対するドル売りの勢いが強く、109円を挟んだ上値の重い値動きとなった。15日は、米国で3月小売売上高をはじめ経済指標が複数発表され、いずれも予想を上回る結果だったことを受けて、リスクオフの動きが加速。米金利の下落幅も大きくなる中、ドル/円は一時108.62円まで値を下げた。16日は、一時週安値となる108.61円をつけた。日中に本邦実需の買いフローによって108.70円レベルから108.94円まで上昇する場面も見られたが、その後は材料難となり小動きで推移。海外時間にも108.96円まで上昇する場面もあったが、節目の109円手前で再び伸び悩んだ。その後は週末ムードで小動きとなり108.79円で越週した。

今週のドル/円相場は上値重い推移を予想する。先週の米金利は月初からの流れ継続で低下。先月末は、米10年債金利は一時1.7%を明確に上抜けていたものの、足許はピークアウトしている。かかる中、米金利をにらみながらの動きとなっていたドル/円はつれ安となった。今週のドル/円も、市場のテーマが限られる状況下、引き続き米金利の動向に注目されるだろう。米金利への影響として、1つは原油価格動向があげられる。先週の米エネルギー情報局の週間統計では、原油在庫が2月以来の低水準となったことを受けて、原油価格が大きく上昇した。2つ目は、他国の金融政策動向。ECBは資産買い入れについて、新型コロナウイルスによって追加投入した部分を、経済の回復とともに終了させる可能性について示唆。欧州金利の上昇につながった。資源価格上昇による米国経済へのインフレ圧力や、欧州金利の上昇に影響される形で米金利上昇につながる可能性は十分に考えられる。となれば、じり安となっているドル/円は、中期目線でみれば徐々に反発するものと考えられる。今週の重要な経済指標としては、22日(木)に米3月中古住宅販売、23日(金)に米3月新築住宅販売の発表を予定している。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/12~4/16)の値動き: 安値 108.61 円 高値 109.77 円 終値 108.79 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第一チーム 上野 智久

(1) 今週の予想レンジ: 1.1900 ~ 1.2100 129.50 ~ 131.00 円

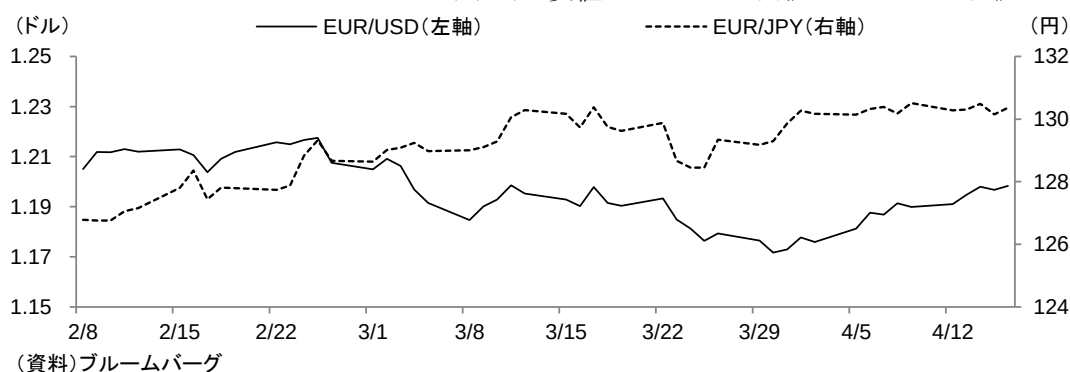
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は前週に続いて上昇する展開。週初12日、1.19付近でオープンしたユーロ/ドルは、ユーロ/円の連れ安となり、一時週安値の1.1872まで下落。その後もドイツでのロックダウン措置の延長を受け上値は重く、1.19台前半での取引となった。13日、序盤は独4月ZEW景況感指数が市場予想を下回中、軟調な値動きが継続。米国で発表された3月CPIは市場予想を上回ったものの、FRBが金融緩和政策を変更するに至らないとの観測が拡がると、米金利低下とともにドル安が進み、ユーロ/ドルは一時1.19台半ばまで反転。翌14日も堅調な値動きとなった。前半は複数のECB関係者が今後の金融政策に関してハト派な姿勢を維持する発言をしたことで上値を抑えられたものの、後半はユーロ/円の上昇やリスクオンのドル売りの動きが強まると1.19台後半まで値を上げた。15日は、米金利が下落に転じる中、ユーロ/ドルは一時1.1993まで上昇した。しかしその後は新規材料に乏しく、方向感のない値動きとなった。16日は米金利が低下する局面でユーロ買いが優勢となり、一時週高値となる1.1995まで上昇。その後は同水準での小動きとなり、1.19台後半で越週している。

本日のユーロ/ドルは、1.19台後半での取引となっている。今週のユーロ/ドル相場は底堅い展開を予想する。最大の注目点は22日に控えるECB政策理事会であろう。前回3月会合ではPEPP(パンデミック緊急購入プログラム)の次の四半期において購入額を拡大させる考えを示し、その後購入が加速する局面も確認されている。現状、このような政策の調整を始めたばかりであり、効果の見極めも必要な状況だと考えており、今回は理事会において政策の変更等は行われたいのではないかと。足元の市場環境については、上昇基調が続いていた米債利回りに調整が入る中でドル売り地合いが強まり、EURが相対的に強含んでいる状況。ドル主導で相場が動いている状況下、ECB政策理事会への期待も高まっていない中では相場の転換点となるイベントに乏しいという認識。となれば、ユーロ/ドルはしっかりとした推移になるのではないかと。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(4/12~4/16)の値動き: (対ドル) 安値 1.1872 高値 1.1995 終値 1.1983
(対円) 安値 129.82 高値 130.60 終値 130.36



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3700 ~ 1.3900 148.80 ~ 151.50 円

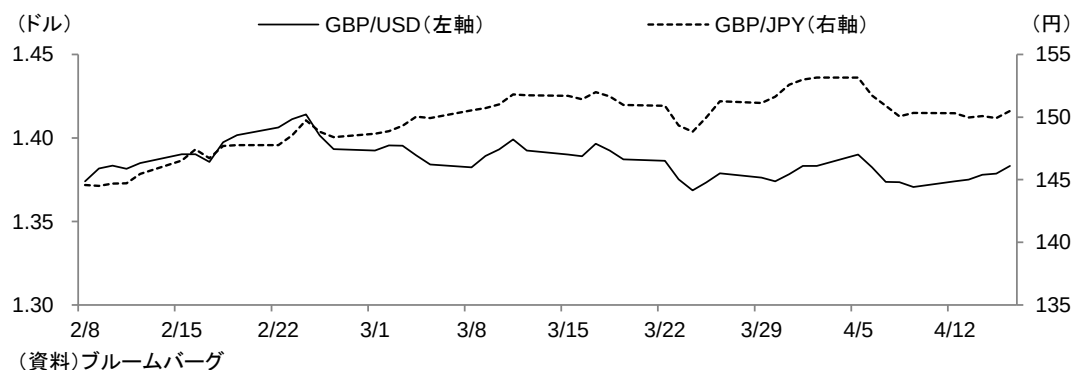
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、週を振り返れば、小動き。ただし、15日までの相場と、16日の相場は別物のように見えた。15日までのポンドは、対ドルでこそ堅調気味の横這いを続けたが、対円、対ユーロでは、むしろ軟調推移が支配的だった。主要通貨市場の地合はドル全面軟調と言えたが、その主因は米長期金利低下に求められたのではないかと。ただし、米長期金利低下自体は、13日の米3月CPIの小幅上振れ、15日の同小売上高の大幅上振れといった、本来であれば金利上昇を促していたであろう米指標の発表を契機としていたように見え、腑に落ちない反応と言えた。CPIについては、9日に発表されていた同PPIが大幅に上振れていたことから、「上振れ期待が膨らみ過ぎていた」反動も考えられた。小売上高の上振れは、米政権による対ロ追加制裁発表がリスク許容度を高め、安全資産への資金流入を促した可能性も考えられたものの、弊行して米株価は続伸しており、株と債券が揃って上昇する展開には、リスク回避やインフレ警戒感よりも、過剰流動性(金余り)という現実が色濃くにじみ出ていたように感じられた。英経済指標も、13日に発表された英2月貿易赤字の大幅増などは、もう少し注目を集めても良さそうに思われたが、ポンドが材料視した様子は読み取れなかった。16日のポンド相場は、打って変わって、明確な下押し先行から、急反発と荒れ模様となった。敢えてポンド反発の要因を挙げるなら、今月5日以降のポンド全面安の要因に疑われた、英ファンドによる日大手電機会社買収を、日電機会社側が「拒否する」と表明したことで、期待されたポンド/円の売り(買収資金手当て)がなくなる可能性は考えられた。ただ、日電機会社側が買収提案を拒否する意向が伝えられたのは15日の日本時間のことであり、タイミングが合わなかった上、まだ、敵対的買収(TOB)の可能性も残されていることから、些か無理のある解釈と思われた。もっとも、この案件に便乗した投機的なポンド売りの買戻しが、週末を控えて一巡した可能性は考えられなくもなかった。

今週の英ポンド相場は、引き続き下落を警戒。16日の乱高下は、要因が明確でなかったが故に、殊更不穏な値動きに見えたが、週を振り返ってみれば、先週は横這いの1週間と言えた。年初来3か月続いたポンド全面高の調整局面は、未だ継続中と見る。目先の要因ではないものの気に懸かったのは、上述、英2月貿易赤字の大幅拡大。赤字拡大は、商品輸入の大幅拡大(とりわけEU以外からの輸入)を主因としていた。ワクチン接種で先行し、先週(12日)には美容室などホスピタリティ産業や、戸外での飲食店営業を解禁した英(イングランド)だが、2月の時点でそこまで消費が旺盛な印象はなかった。おそらく、前後したポンド高の影響もあったと思われるが、2月の時点で旺盛だった消費意欲(そのこと自体英経済にとって悪いことではないものの)が、各種営業/行動制限の段階的な解除で、今後益々旺盛になっていく可能性は考えられる。一方で、引き続き営業/行動制限措置を継続する大陸欧州など周辺国の需要低迷が、英輸出の伸びを抑制し続けるとしたら、英貿易収支の更なる悪化は避けられないだろう。英金融資本市場の資金調達力が、大陸欧州に流出しつつあると見られる現状での英貿易(経常)赤字拡大は、中期的にはポンド安による修正を必要とする事象に違いない。今週は、20日(火)に英3月失業率、英12~2月平均賃金、21日(水)に英3月CPI、23日(金)に英3月小売上高などの英主要経済指標の発表が相次ぐが、余程予想から乖離した数字でなければ、ポンドが材料視する可能性は低い。仮に小売上高が強い伸びを示した場合には、単に内需回復を好感するだけでなく、上述、輸入=貿易赤字拡大という目線を持つことも必要と思われる。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(4/12~4/16)の値動き: (対ドル) 安値 1.3670 高値 1.3849 終値 1.3849
(対円) 安値 149.39 高値 150.83 終値 150.49



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.7580 ~ 0.7800 83.00 ~ 84.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは週初0.76台で推移した後、週後半にかけては0.77台へ上昇したものの0.77後半で頭打ちとなった。12日は手掛かり材料に乏しく、終日方向感に欠ける値動きとなった。0.7620近辺で取引開始後、クロス円主導で円買いが優勢となる中、豪ドルは一時0.7596辺りまで下落。その後、ユーロ圏2月小売売上高が市場予想を上回りユーロ買い・ドル売りが強まると、豪ドルも買い戻され0.7620近辺まで戻した。13日は豪3月NAB企業景況感が過去最高の25を記録し、中国3月輸入も+38.1%と大きく増加するも、市場で米3月CPIの上振れ予想が広がる中、ドルが安定した動きすると徐々に豪ドルの重しとなり0.75台まで下落した。エネルギー価格上昇やベース効果に加え、1.9兆ドル規模の追加経済対策にも支えられた米CPIは市場予想を上回った。米債利回りが上昇し、ドル買いとなると豪ドルは0.7586まで下落。但し、これだけでFRBの姿勢を変える事とはならない為、その後はドルロングの巻き戻しとなり、米株が最高値を更新。豪ドルは0.76半ばまで戻した。この他の材料としては米国で血栓が生じる懸念からジョンソンエンドジョンソンの新型コロナワクチンの接種を一時停止するよう米保健当局より勧告があった。14日はNZ中銀が金融政策決定会合にて政策金利と資産購入プログラムの規模を据え置き、「必要ならOCR(政策金利)を引き下げる用意がある」とした。金融刺激策を直ちには解除しない方針を示唆した事で、NZDは上昇、豪ドルも連れ高となり0.76台後半へ上昇。来週からNZと豪州間で隔離なしの往来が再開されることで780億の経済効果見込みが出ている事も両通貨の上昇を支えた。NY時間にかけてドルの下げが継続し、原油を始めとした商品価格がラリーすると豪ドルは三週間ぶりの高値0.7738まで上昇した。15日はドル安地合いが継続する中、発表された豪3月雇用統計は失業率が(前回値5.8%から)5.6%へ改善したものの、正規雇用20.8kの減少が重しとなり、数字直後に0.77半ばまで上昇した豪ドルは即0.7720近辺まで引き返し、ロンドン時間にかけてやや重く推移した。その後は米10年債利回りが1.61%へ下落するとドル売りが先行し、原油高にも支えられた豪ドルは0.77半ばまで再度戻した。NY時間では米3月小売売上高が大きく予想を上回ったものの、大きくドル買いとはならず、反対に米債利回りは下落幅を拡大させ、ドル売りを背景に豪ドルは支えられた。16日は値幅が出ず、0.7724-0.7759のタイトレンジで終始した。

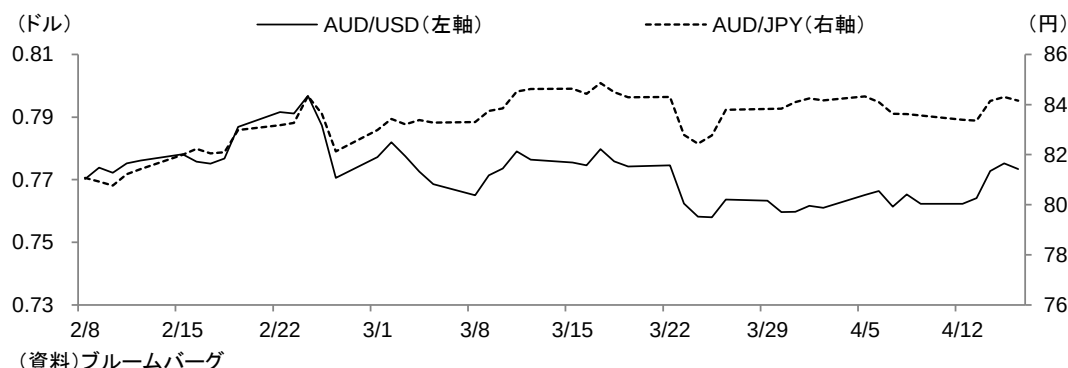
先週は力強い米CPIや米小売売上高が発表されたにも拘らず、いずれも発表後にドル買いとならず、また米債利回りは反対に下げるといふ市場の反応を見ると、商品通貨や株などにリスクオンとして反応してきているように感じる。もしくは、この足許の好調な米指標は一時的に追加経済対策等に支えられているという見方をされているのかも知れない。いずれにせよ短期的にドル高は期待しにくいという見方が広がっている。故に短期勢はドルショートポジションを構築している可能性があり短期的に豪ドルは支えられ易いとみるが、今週はやや手掛かり材料に乏しく、豪ドルも0.77半ば越えのところで頭を抑えられてしまっているため1ヵ月ぶりの0.78台に到達できるか、もしくは0.76を再び割れるかで今後の方向感が少し見えてくるとみる。まずは明日のRBAミニッツで新しい材料がないか確認したい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/12~4/16)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7585 高値 0.7761 終値 0.7734

(対円) 安値 83.03 高値 84.41 終値 84.15



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。